

審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 2891号	氏名	中村 佐知子
審 査 担 当 者	主 査	青木浩樹	(印)
	副主査	二野高史	(印)
	副主査	吉田典子	(印)
主論文題目 : Trends in coronary risk factors and electrocardiogram findings from 1977 to 2009 with 10-year mortality in Japanese elderly males -The Tanushimaru Study - (田主丸研究における 1977 年から 2009 年までの日本人高齢男性の 10 年間の死亡と冠危険因子及び心電図所見の変遷)			

審査結果の要旨（意見）

本研究は我が国有数のコホート研究である田主丸研究において、30年間にわたる冠危険因子と心電図異常の変化、さらに10年毎の総死亡率に対する危険因子の時代による変遷を検討した研究である。心電図という身近な検査を丹念に解析したデータは貴重であり、30年間にわたる総死亡危険因子の変遷の調査は他に類を見ない。危険因子の変遷は背後にある栄養状態や医療環境の変化を表しており、また他の臨床研究や疫学研究でも時代背景を考慮すべきことを示唆する興味深い研究成果である。良く検討された研究デザイン、実施方法、解析手法であり、質疑応答も論理的で、医学博士の学位に値する研究と考えられた。

論文要旨

田主丸研究で、これまでに行った定期的な大規模疫学調査より、1977年、1989年、1999年、2009年の4つの時代をベースラインとし、それぞれの時代から10年間の死亡、動脈硬化性疾患の予後調査を行うことにより、65歳以上の高齢者のベースライン時における冠危険因子の変遷、心電図変化の変遷を比較し、古い時代と新しい時代において、それらに差があるのかを調べた。対象は65歳以上の男性で1977年の231人、1989年の332人、1999年の389人、2009年の445人であり、冠危険因子は、総コレステロール、拡張期血圧、BMI、中性脂肪、尿酸は上昇し、喫煙率は減少していた。心電図変化では、QRS幅の拡大、majorな心電図変化、PR間隔の短縮、補正QT間隔の短縮、LVHの減少、心拍数の減少などを認め、1977-1987年では、年齢、喫煙習慣、majorおよびminorの心電図変化が総死亡と関連しており、1989-1999年では、年齢、総コレステロール値（負）、補正QT間隔が、総死亡と関連していた。さらに、1999-2009年では、年齢、喫煙習慣、総コレステロール（負）、補正QT間隔が総死亡と関連していた。死亡を予知する冠危険因子、心電図変化は時代とともに変遷するが、近年では、喫煙習慣、心拍数の上昇、収縮期血圧の上昇は、とりわけ65歳以上の高齢者の強い関連因子であることが示唆された。